
君に伝えたかった言葉

縷縷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君に伝えたかった言葉

【Nコード】

N2185Y

【作者名】

縷縷

【あらすじ】

人を誰でも敵にまわして
人を信じられなくなってしまった1人の男の話

前書き

．．．．．

ありがとう

俺の中の辞書には無かった言葉を言わせてくれた君。

こんな言葉言える日がくるなんて思ってもいなかった。

人を殺してでもいいと思ってた俺が．．君に出会えて本当に良かった。

ありがとう．．．

ありがとうございました。

そしてこれから見守ってください。

．．

2 - (1) 姉ちゃん

俺には6歳年上のお姉ちゃんがいた。

その姉ちゃんは小学校の時一生懸命勉強して中高一貫の学校に入学した。

姉ちゃんはいっつもにこにこしてて

優しくて・・そんな姉ちゃんが俺が10歳の時、突然死んだ。

事故死だったとのこと。下校途中にトラックにはねられたらしい。俺は突然すぎて何がなんだか分からなくてお通夜のときも終始つたままだった。

すごい事故だったらしくお通夜には警察官とトラックの運転手と学校の先生達もきた。

でもなぜか姉ちゃんと同級生の子たちは誰もこなかった。

俺のぼんやりとした意識の中間こえたのは警察と運転手と教師の声。

「佐藤南海さんはどのような状態だったのでしょうか。」

「あの子が急に飛び出してきたんだ！！びっくりしてブレーキを踏んだけど

間に合わなかったんだ。」

トラックの運転手は悔しそうに下をむいた。

「そんなわけない！！南海さんは注意深い人だったんです。言い訳してるんじゃないんですか。」

姉ちゃんの担任らしい人が運転手に向かってそう言った。

「違う。本当だ！！そっちこそ学校でいじめとかあつてたんじゃねーのかよ。」

「そ、そんなことはない！！！！とても仲のよいクラスだったんだ。」

2 - (2)

どうして人間はこんなにも自分を守る事しかできないのだろう。

姉ちゃんが死んだのを惜しまずにどっちのせいだとか罪の擦り付け合いをしている。

っ、ふざけんじゃねえ。

俺は気づいたら運転手と担任につかみかかっていた。姉ちゃんは俺のたった1人の兄弟だったのに。

なんでもしてくれたのに。どうしてお姉ちゃんだったんだ。世の中には死んでもいいようなクズがいるだろ。ここにいる二人みたいに。

「　　ざけんじゃねえ。俺はお前等をぜってー許さねえ。」

二人は抵抗もせず黙って俺に殴られ続けた。

警官1人がとめに入ったが俺は乱暴をやめなかった。

「君、やめなさい！！そんな事してもお姉さんは生き返るわけじゃないんだぞ。」

警察にそういわれ俺は落ち着きを取り戻した。思いつきり拳を握った。

「姉ちゃんの事は俺が本当の事をつきとめる。絶対に人を殺しても。」

俺はそういつてその場をたった。

俺はそれからしばらく学校にいなかった。家にいてずっと勉強していた。

それは姉ちゃんの通ってた学校に入学するため。

「レン！！あなたも姉ちゃんの学校に行くの？」
ある日の晩俺はお母さんにそういわれた。

2 - (3)

「ああ…もう決めたから。」

「いや！！絶対駄目。無理よ。」

お母さんは俺の腕を思いっきりつかんだ。

「何で？…お、姉ちゃんの生きてた時通ってた学校だから
もしも行くとなったとき辛いから？」

俺はまだ俺より背の高いお母さんを見つめながらそういった。

「そうじゃなくて、あんたがあんなにボコボコにした
先生が前いた所なんだから行くと変な目で見られるわで
とっても恥しいじゃない！！！」

俺はお母さんのその言葉に思わず目を見開いた。

「あんな奴殺したっていいぐらいなんだ！！！あれだけですんだ
ならいい方だよ。」

お母さんの手を振りほどいて近くにあった本をお母さんの顔面目掛けて

投げ俺は二階の自分の部屋まで走っていった。

お母さんまであんな事をいうなんて思わなかった。

姉ちゃんが死んで悲しいのは俺だけなのかよ。

そつえばおかしいよ。クラスの友達だって来てくれてなかった。

担任の奴はいじめという言葉をあせりながら否定したし・・・。

もうすぐ11歳になるといふ夏、俺は人が信じられなくなった。

3 - (1) 入学式

姉ちゃんが死んでから今日で丁度2年。

ニュースにまた報道されて辛さを蘇えさせられた。

「2年前、東京都横浜市でトラックにはねられ・・・」

俺はすぐにチャンネルをかえた。

そこにはカメラに目を向き放心状態で立っている

2年前の俺の姿があつたからだ。

テレビはさっきの生々しいニュースからバラエティ番組へと切り替わった。

「君かわういーねー」。

さんきゅうでいーす。ちゃらめがねー」。

そこには20代の一人の男が写っていた。

金髪で黒縁の伊達メガネをかけていていかにも

“チャライ”男だった。

「俺もこんな格好をすれば何もかも忘れられて

明るく生きられるのかな。」

俺はTVを前に一人でそう呟いた。

それから俺は中学生になる前の春休み
髪を金髪にし耳に穴をあけてピアスをつけた。

その後しばらくして

姉ちゃんの通ってた星月太陽学校から

“合格おめでとうございます”のハガキが届いた。

3 - (2)

入学式当日3時間前、俺はまだダラダラしていた。

あれ以来親ともあまり口を聞かなくなった。

だから入学式にも来ないと思う。

そして俺は新入生代表の挨拶をしなければならない。
面倒臭いが言わなければならない事があるから。

俺は金髪の髪をワックスでセットしピアスをつけて
リビングに向かった。

リビングには味噌汁とご飯がラップしておいてあり
その下の紙にこれを食べてから行きなさいと
書いてあった。

「うまつ。」

誰もいないリビングでお箸を持ち替えながらそう言った。

TVに目をむけるとその隣に綺麗にアイロンしてある
学校の制服がハンガーにかかっていた。

学校の制服は上はカッターとネクタイ下はチェックの
七分丈ぐらいのズボン。

俺はシャツを出したまま制服を着て
近くにおいてあったスポーツバッグをからって家を出た。

指定の黒い靴があるがそんなの知ったことじゃない。
俺は構わず自分の靴を履いて行った。

少し予定より早く出てしまったけどクラス表をみて
担任の所に行くつもりだから丁度良い。

自転車で風を切って俺は猛スピードで学校へ向かった。

3 - (3)

学校に着いて俺は今クラス表掲示板の前にいる。

俺のクラスはB組で担任はどうやら女の子のようだった。

玄関から入って校舎ないへと足を踏み入れた。

結構新しい作りでめちゃくちゃ広くて綺麗な所だった。

「よねなが米永米永。」

俺は担任の名前を唱えながら担任を探していた。

この広い校舎だから探すのに30分以上かった。

向こうからは米永がこちらに向かっていて

丁度話しやすい位置だった。

俺はすれ違う寸前で米永に向かって言った。

「米永：B組。俺等の担任だろ。」

米永はびっくりして振り返った。

「え、そ、そうだけど。何その金髪頭！！ふざけないで。」

俺はふふつと笑ってやった。

「安心して、あんたが今思ったようにここの6年間の学校生活
楽しいものにはさせないから。」

米永は俺の腕をがしつと掴んだ。

「ちよつと校長室来なさい！！」

米永がそう言ったから俺はポケットからカッターを出した。

「校長室に用はない。俺が用あるのはテメえだけだ。」

大きい声で言い過ぎたのか。遠くから一人の男が走ってきた。

「あんた何やってんだ！！！」

校長だった。

「そ、そうなんですよ。困るんですよこの生徒。」

米永はあせり顔でそう言った。

「ちよつとこっちに來なさい。」

校長が引つ張っていったのは米永の方だった。

「やっぱりな。」

俺と姉ちゃんの存在を知ってるこの先生は俺に恐れてる。

姉ちゃんの事を言われて星月太陽学校の名に傷がつかないように。

3 - (4)

俺は自分の教室B組へと向かっていた。

図書室の前を通り過ぎ音楽室の横の階段を登った所に
1 - Bと書かれた札が掛けてあった。

俺は勢い良くドアを開けた。
がらっ

その音とともに俺は皆からの視線を感じた。

まだ人になれてない生徒達。皆が席に座って
本を読んだりしている。

でも俺が教室に入ってきた瞬間それは変わった。
本を読んでいた人は手をとめ前後の子たちと
何やら話しはじめ教室は一揆に騒がしくなった。

俺は自分の出席番号通りの席へとつかつかと進んで
いった。

カバンを机の上に乱暴においたせいで隣の席の寝ていた
女子が目覚ましてしまった。

「びつくりしたあ。」

顔の整った綺麗な顔をした女の子だった。

普通はここで謝るべきなのだろうけど俺は前をむいたまま
黙っていた。

「隣の席なんだあ。よろしく。」

その女は金髪に対して驚きもせず俺を見つめながらそう言った。

「ああ。」

俺が無愛想に返すとその女はあかるく元気な声で

「あたしの名前は佐藤玲羅さとつれいらそっちは？？」

と尋ねて来た。

「佐藤蓮れん」

俺がそう言うと玲羅は一瞬驚いたような顔をしたがすぐに
元通りの顔に戻った。

そして前を向くと急いで携帯をとりだしてメールを打ち始めた。

変な奴。

最初はそんな風にしか思っていなかった。

3 - (5)

数分立つと教室に担任が入って来た。

「入学式が始まるからその出席番号順に廊下に並びなさい!」
先生は一人ずつの背中を押しながらそう言った。

俺が廊下に出る寸前で先生は手をとめ俺と目を合わせた。

「佐藤あんた代表の挨拶するんでしょ??」

俺は視線だけで

「ああ」とうなずいた。米永はそれを理解したようで俺の背中を押しながら

「頑張んなさい。」とだけ言った。

体育館の前にA組B組C組D組の順番で並んだ。

外から体育館の声はもれていなかった。

中に入るとしんとした体育館からいっぺんして大きな拍手に包まれた。

B組が体育館に入ると俺を見た2年生の一人の男が指差してきた。

俺は軽く睨みすぐに前を向いた。

俺をみると皆ざわざわした。でも俺はそれに動じない。

だって俺は勉強や将来の為にこの学校に入ったわけではないから別にダラダラしてようが関係なかったから。

綺麗に並べられた椅子に俺はどかつ、と腰をおろした。

「静かにしてください。入学式がはじめられません。」

女の会長らしき人が2・3年生にそう言った。

「では、入学式をはじめます。気をつけ」

会長がそういうと2・3年生は一斉に立ち上がった。

1年生はおろおろしながらも先輩達につられるように立ち上がった。

「礼。」

後ろを見るととても綺麗なお辞儀だった。

俺も誰かのせいで人生を狂わされなかったらああいうのに感動して2年になったら先輩として1年に格好良い所を見せてやろうと思っていたのかもしれない。

「佐藤蓮くん。」

微かに横から声がした。ゆっくり首を横に傾けると校長先生が手招きをしていた。

「何。」

とジェスチャーを送ると校長は

「もうすぐ代表の挨拶があるから裏ステージに行かなきゃ。」

と言った。

俺は静かに立ち上がり皆の前を通ってステージ裏へと向かった。

「緊張せずにリラックスだよ。」

「余裕だから。」

俺は余裕の表情でそう言った。

3 - (6)

ステージ裏から中を見るとさっきの会長が一年生に向けて
応援のメッセージを贈っているようだった。

その会長がステージをおりるとすぐにマイクを手に

「次は新入生代表の挨拶です。」
と言った。

「蓮くん行つて来なさい。」

俺がステージの真ん中に行くと一瞬しん、と静まり返り
一揆にざわざわした。

「静かにしてください。」

と会長が言ったけれどそういう会長も少し驚いている様子だった。
俺はマイクを持って口を開いた。

「えっと先輩方、俺は優等生ぶりたくてこの学校に入ったわけでは
ありません。」

俺がそういうとどこからか、ふざけんな。という声がした。

「この学校には恨みがあるんですよ。」

こんな学校今すぐにでもぶっ潰してやる。」

俺は冷たくそう言った。

俺のそんな態度に皆腹を立てているはずだが誰も何も言おうとは
しなかった。

一人の先生を除いては。

「あんたふざけるのもいい加減にしなさい!!」

それは米永だった。皆の視線は一揆に米永に集中する。

「ちょ、やめてください。」

横にいた校長が小さい声でそう言いながら米永をとめていた。

俺は米永の方にマイクを本気で投げつけた。

どんっ

3 - (7)

マイクは米永の横の壁に大穴をつくった。

「調子乗ったことという下次は当てるますから。」

俺はにこっ、と笑ってみせた。

正直米永にキレたわけではなかった。

本当は校長の学校の名を傷つけないようにしている態度にムカついたんだと思うけど米永にマイクを投げた。

もうこの頃から自分が何だかわからなくなってしまっていた。

体育館を出る際、校長先生から

「放課後に校長室によりなさい。」

といわれた。

皆の前だからよそよそしい態度をせずに

俺に怒った口調で言う校長に余計腹が立った。

教室に戻って出欠確認がされた。

俺の名前が来る前に俺は寝たふりをして名前を呼ばれたのに気づいていても無視をした。

俺の後ろの奴の名前が呼ばれた。

「篠田祐也」

返事がなかった。

「篠田くん入学式なのに休み？」

米永が皆にそう言ったがそんなこと誰も知らないから質問に答えようとする生徒はいなかった。

4 - (1) 親友

何日かたったある日、俺はいつもどおり

教室へ向かっていた。

教室に入って席につくと何か違和感を感じた。

すると後ろから寝息のような音が聞こえてきた。

後ろを向くとそこには知らない奴がうつ伏せになって

寝ていた。

髪は金髪を黒に染め直したような赤髪で風でふわふわとなびいていた。

コイツもしかして篠田祐也？

俺が疑問な顔で篠田を見つめていると玲羅が俺に話しかけてきた。

「その子祐也って子なんだけど、小学校ん時かなり

荒れてたらしいから。まじ蓮みたいないない？」

笑いながらそう言いやがった。

「あっそー。」

俺は興味なさそうに玲羅に言い放った。

正直まじで興味ない。興味持つてる暇なんてないし。

俺は姉ちゃんの事件の手がかりを見つけるためにこの学校に来たんだし。

「何か荒れ放題だったから小学校ん時の教師と母親が24時間勉強につききりでこの真面目学校に送り込まれたって噂。」

玲羅は微笑みながら言っていると後ろの祐也が

少し右に傾いた。

手にのせていた頭が落ちてまい目が覚めてしまったようだ。

「おお、寝てたのか。」

祐也は独り言のように呟いた。

俺と玲羅は何事もなかったかのように黒板の方を向いた。

「つつつか金髪じゃんつ。ココ金髪でもいいのかよ。」

祐也が俺の肩を思いつきり叩いた。

俺はうざそうに後ろを振り向いた。

「あーあ無理やり染め直されたし、あのままがよかったのに。」
俺が無視をしたから一人でべらべらとしやべりはじめた。

4 - (2)

なんなんだよコイツ。

祐也は髪が赤くて目は色素の薄い茶色で顔立ちも結構よかった。

今思うと今まで出会ったどの男よりも優しくかつこよくい男だったんじゃないだろうか。

「お前うつとうしいから。」

それだけいうと体を前に戻した。

「つちえ。やっぱり俺の事みとめてくれる奴なんていねえよな。」

小さい声だったが微かに聞こえたその祐也の声。

少し寂しそうだった。

このころからだろうか。何か自分と似ていると思い始めたのは。

昼休み俺はコンビニで買ってきたパンを一人で食べていた。

金髪にピアスに指定じゃない着方の制服に靴。

この格好でいると本当に楽だ。

誰も近づきたがらないし先生さえ文句1つ言わない。

・・・今日の前にいるコイツを除いては。

「飯食ってんの??俺と一緒に食おうぜ!」

祐也は俺の目の前の椅子に腰掛けた。

「一人って寂しくね?? お前だったら誰とでも友達になれると思うのにな。」

祐也は下を向きながら言った。

「…」

祐也は顔をあげ真っ直ぐ俺の目を見てきた。

っ、負けた。

「別に寂しくねえよ。俺に友達とかそんな名前だけな奴必要ねえし。第一わざと近づきたがらないようにしてるんだし。祐也が少し笑った。」

「やっと普通にしゃべってくれたな。つうか俺も友達何て必要ないと思ってる。誰も俺の事みとめてくれねえしさ。」

やっぱり朝も小声でそう言ったんだ。

「意味不明。」

俺は苦笑い気味にそう言った。

4 - (3)

「お前こそ何そんなひねくれてたんだよ。」

祐也は俺の髪の毛に触れながら口を動かした。

「俺は……。」

言いかけてやめた。信用してないし何より俺の存在を全否定されそうで怖かったから。

「あ？何？」

祐也は気になるそぶりを見せた。

言ったら絶対ひかれるだろうな。多分コイツも俺に近づきたがらなくなるだろう。

でも俺は一人の方が楽だし……。

ひかれて俺から離れて行ってくれた方がいいのかもしれない。

「俺は、何で姉ちゃんが突然死んだのかの手がかりをつきとめるためにこの学校に来たんだ。」

ここの教師はいじめの事を聞かれた時あせってたし、この学校の名に傷がつかないようにだと思っけど。

姉ちゃんをひいたトラックの運転手は教師のせいとか姉ちゃんのせいとかにして、俺ん所の母さん何か俺がその時ボコった先生がいるから姉ちゃんがこの学校にいたから行くとなった時辛いから何か関係なしにこの学校に俺が行こうとしているときとめに入っし。

本当意味わかんねえんだよ。俺の周りの人間は……。」

言ってしまった。祐也の顔がみれない。もしかしたらいい気味だと

笑っているのかもしれない。

「お前：大丈夫か？？」

突然出てきた祐也の言葉に驚いて俺はパッと頭を上げた。

「俺もそんな感じで傷つけられて人間何て信用できねえんだよ。」

祐也は泣いていた。自分の過去を思い出してなのかそれとも

俺の話を聞いてなのかはわからないが今、目の前にいる男は涙を流している。

すると祐也も何やら話しを始めた。

「俺には小学校ん時彼女がいたんだ。小さくてどじで心配な奴でさ。ある日その彼女とソイツの女友達の数人が放課後の教室でしゃべってて。

その日彼女の誕生日だったから一緒に帰ろうと思って静かに教室の前で

待ってたんだ。そしたら俺の名前が出てきて悪いとは思ってたんだけど教室のドア越しに移動してその会話を聞いたんだ。

その会話聞かなきゃ良かったんだよな。彼女俺の事おもちゃとしか思ってた

なかったみたいなんだ。告白してきて優しくしてくれたから俺もじよじよに

好きになっていて。

彼女がその時言った言葉は、私の事好きになってきてるみたい、まじバカ。

もうすぐ振るから。それを聞いた友達は爆笑してた。

彼女と友達が教室から出てきそうだったから俺は今来たように装って彼女の

方へ歩いていった。帰りに彼女と二人きりになったからさっきの会話の事

について本当かどうか聞いてしまったんだ。そしたら彼女半泣きで、好きだから告白するって

友達に言ったらその友達がすぐに別れるなら応援してあげるって言

ったって

言ってきたんだ。

俺は彼女を半信半疑だったけど信じて今度はその友達に本当の事がどうか聞いたら

ありえない。彼女の方がおとしいれてやる。って言ったし。って怒鳴って。

それから友達は集団で彼女をいじめはじめたんだ。俺は彼女の事が本気で好きだったから

彼女と別れずにいじめから彼女を守っていた。

そしたらある日突然彼女と友達が仲直りしていて、今度は俺が彼女と友達からストーカー

呼ばわりされるようになって。

俺、親には捨てられた同然だったから家には居場所何てなくて学校でしか楽に暮らせなかったのに。

そんな場所まで奪われてしまったから、もう一人で生きるしかねえじゃん？

だからもう、どう人を信じてやればいいのかわからねえんだ。」

祐也は泣きながら言った。

俺よりも祐也の方がよっぽどひどいかもしれない。

こんな祐也の心の傷何処で、誰が癒してやれるんだろ。う。きつと俺じゃ無理だ。自分の事で精一杯だし。

「蓮。俺の友達になってくんね？俺もう一人とか辛いから。

この学校で変わろうと思ってたんだ。でもどうしたらいいか分かんなくて

しばらく学校休んだ。明るくいればいいことに気づいたから
やっと学校にこれたんだ。」
さっきの涙が嘘のように祐也は俺に笑顔をみせた。

4 - (5)

「しょうがねえなあ。お前は信用してやるよ。」

不器用でそんな言い方しかできないけどここ数年の中で一番最高の笑顔を祐也にみせた。

「ありがとな。よろしく蓮。」

「ああ、よろしく祐也。」

二人は最高の笑顔で握手をした。

「このパン1個いるか？食べねえからまじ。」

「あ？いらん。実際の所飯一緒に食う為にココ来たわけじゃねえし。ただ絡みに来ただけ。」

祐也は二力つと笑った。

「人がせつかくやろうつつてるのに。」

うぜえ。俺から物貰うなんて100年はやい。」

「お前がやるつていい始めただろ。意味不明！。」

俺も二力つと笑ってやった。

「そろそろ教室行くか。」

俺が立ち上がると祐也も続いて立ち上がった。

「そうだな。もう昼休みも終わりだな。」

この学校ではじめて信用できる友達ができた。
これからはもう一人じゃない。

眩しい太陽に目を細めながら俺たち二人はドアノブに手を伸ばした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2185y/>

君に伝えたかった言葉

2011年11月17日21時38分発行